2011年（平成23年）
第46号
（10月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

ただひたすらに、人さまの幸せのために
～開祖さま入寂会～

大聖堂と一緒にご供養

会長先生ご法話

10月4日（火）、本部・大聖堂及び全国の教会において「開祖さま入寂会」が行われた。『法華経によって、すべての人を救いたい』との願いをもって本会を創立した庭野開祖は、生涯を法華経の広宣流布と世界平和に向けて精力的に取り組んだ。「入寂会」は平成11年10月4日に92歳で入寂した庭野開祖に、会員が報恩感謝の誠を捧げるとともに、今後の精進を誓う式典として行われた。

衛星放送により本部式典の模様が放映され、大聖堂と共に読誦供養を行い、元教会長の説法があった。そして、庭野会長が「ものの見方、受取り方次第で、人生が変わる」と語った。

衛星放送の後、中村教会長があいさつに立ち「人々の心に光を当て、ご法の種をまき、実をむすんで、人々の幸せを願って取り組もう」と話した。

お知らせ（１１月の教会行事）

１１月	１日（火）	朔日参り	9：00～
	３日（祝）	七五三詣り	10：30～
	１０日（木）	脇祖さまご命日（研修）	9：00～
	１５日（火）	開祖さま生誕会	9：00～
	１５日（火）	開祖さま生誕祭	19：30～

天台の教え脈々と　～延暦寺法華大会にふれて～

10月4日（火）、比叡山・延暦寺で開かれている「法華大会（ほっけだいえ）」に参加する機会があった。姫路教会が書写山圓教寺と長年にわたり交流があったので参加。この「法華大会」は4年に一度という天台宗の最高論議法要で1週間にわたり行われる。

古式に則って行われる儀式を忠実に実施することで、天台宗の教えを受け継ぐとともに、日本の文化・伝統の継承に貢献している。

大講堂に向かう大行列

大講堂の前庭で、天皇の勅使と、天台教学の最高位「探題（たんだい）」、探題に次ぐ「已講（いこう）」の3人が輿に乗って到着する「三方の出合い」に続き、堂内で小学生の童僧による「稚児番（ちごつがい）論議」があり、延暦寺の歴史や天台宗の教えを節付きで披露した。

その後、「夜儀（やぎ）」といって、大講堂で天台宗の僧侶としての最終試験である「広学竪義（こうがくりゅうぎ）」が行われ、ろうそくが点る暗闇の中に、受検者である「竪者（りっしゃ）」が飛び込んで入り、問者からの質問に答える形で論議が進む。夜儀は深夜2時ごろまで続くという。

三方の出会い

時事刻々

久しぶりに京都御所の中を自転車で散策した。爽やかな秋の空気を味わいながら、清々しい気持ちになった▼御所の中は砂利道だが、自転車が通るところには、砂利のない細道ができている。多くの人が通った跡に自然にできた道だ▼ところで、どんな道も最初に一歩を踏み出したところから始まる。二千五百年前に釈尊が法を説いたから仏道がある。本会も庭野日敬が創立して始まった▼七日にアフリカと中東の女性三人がノーベル平和賞に決定したと報道された。彼女たちは暴力や圧力に苦しむ人々を、平和に導く一歩を歩んだ人たちだ▼ノルウェーのノーベル賞委員会は、女性の権利擁護と地位向上を全面的に支援し、旧弊を打破し、平和を構築する可能性を秘めた「女性の力」にエールを送った形だ▼破壊と創造を繰り返してきた人類にとって、生命の継承者である女性こそ、平和道の開拓者にふさわしいと言えよう。

深草墓園秋季慰霊法要に列席

～新宗連メンバーとして～

9月14日（水）、京都市深草墓園において秋季慰霊法要が行われた。この法要では京都市内の各宗派の代表者等を招待しており、京都教会からは京都府宗教連盟のメンバーとして中村教会長らが列席した。

同墓園では毎年春秋の彼岸ごとに、墓園に眠る英霊を慰めるために式典を開催している。この慰霊式典は、昭和33年7月に墓園が開設されて以来、毎年実施されており、今回で107回を数える。

慰霊法要は2部構成になっており、1部は京都市が主催する「慰霊式典」を、2部は遺族会が主催する「法要」を実施。慰霊式典では、門川大作・京都市長の式辞に始まり、京都市議会議長と遺族代表の弔辞、遺族代表の献花が行われた。

法要は宗派を超えた合同慰霊として実施されている。今回は、臨済宗大本山南禅寺の奉仕によって執り行われた。般若心経の読経と共に門川市長から順次来賓焼香があり、引き続き参加遺族の焼香が行われた。遺族全員の焼香が終わると同時に読経供養も終了し、秋季慰霊法要は閉式された。

赤い羽根募金を実施　～明るい社会づくり運動～

10月1日（土）・2日（日）、各地区明社の会員が街頭に立ち、市民に「赤い羽根募金」への協力を呼びかけた。同募金には明社として毎年恒例で行っており、集まった募金は共同募金会に届けられ、京都府内の福祉に役立てられる。

自己を高めることが最高の先祖供養

～秋季彼岸会にて～

9月23日（祝）、23年次秋季彼岸会が行なわれた。婦人部・少年部による奉献の儀に続き、1万5千体の精霊と2千家の先祖代々の供養が行われた。その後、中央支部壮年部長による説法があり、中村教会長のまとめで式典を終えた。

教会長は「本当の先祖供養は、自分自身の心を高めること。つまりは、明るく、優しく、温かな人間になることです。ご先祖様に喜んでいただける私たちにならせて頂きましょう」と述べた。

自分自身の長所を見い出そう　青少年研究会にて

9月18日（日）～19日（祝）、青少年が集まり、1日目は参加者が一体感を味わうプログラムが行われた。2日目は教会役員も加わり、近畿ブロック・堂前青年教務員による研修を受けた。リフレーミングを体験。例えば自信がない⇒感受性が豊か、話し下手⇒聞き上手、自分勝手⇒自分を解っているなど、短所と思っているところも見方を変えれば長所になると学んだ。

●あなたはお役がある人

（校成会のことば）

大変な苦労を抱え四苦八苦している時、その人は「あなたはお役がある人だよ」と言われてきました。そして、「あなたの苦労は、あとで必ず人を救っていく、なくてはならない力になるんだよ」と励まされてきたのです。難儀な経験をしている時こそ、悩み苦しむ人に慈悲の手を差し伸べていく上で不可欠の体験をしている最中なのです。それによって人の痛みのわかる人間に生まれ変わり、人を救う力を身につけることができます。まさに地涌の菩薩が大地をくぐり抜けようとしている瞬間であるといえましょう。このような受けとめ方ができると価値観の大転換となり、菩薩の自覚も生まれてきます。ですから、この「あなたはお役がある人」という言葉は極端に悪また、逆に初めて大役をいただき、予想以上にうまく遂行できた時にも、「あなたはお役がある人だね」と言われました。いい条件の中にいる時だけでなく、極端にいい条件にいる時にも使われてきた言葉なのです。

『薬草論品』に、大きな木にも小さな木にも立派な存在価値があると説かれているように、どんな人もこの世に生まれてきた以上、必ずその人なりのお役を背負っているのです。その自覚をはっきり持っていると勇気がわき、生きがいも出てきます。私たちは仏の遣いとしてこの世に生まれてきたと教えていただいていますから、仏さまの手足となり、菩薩として人のために尽くすお役があるのです。それが本当の意味で価値ある人間です。そうしたことに一日も早く気づいていただくために、「あなたはお役がある人」という言葉が使われてきました。

今月の言葉　～人を幸せに～　京都教会長・中村憲一郎

今月は立正佼成会を創立し、私たちを幸せにお導きくださった開祖さまの入寂会を迎えます。開祖さまがご入寂されてから丸 12 年、一般的には十三回忌となります。年回を通して身近に亡くなられた方々を偲び、その思いに心を馳せるように、私たちも開祖さまの願いに改めて心を寄せさせて頂きたいと思います。

開祖さまが、脇祖さまとともに本会を創立した目的は、**「現実に人を救い、世を立て直す」**ためでした。そのためには、法華経に示された仏教精神を世に広めることが最大事だったのです。

法華経には、お釈迦様がこの世にご出生された一大事因縁（理由）が説かれ、道元禅師が「一切衆生、悉有は仏性なり（生きとし生けるものは、すべて仏性である）」と表現されたように、この世に存在するすべてのいのちは、仏さまと同じいのちであり、永遠であると説かれているのです。まさに「天上天下、唯我独尊（すべての命が尊い）」なのです。お釈迦様は、その一大事を私たちに伝え、教化するためにこの世に出現されたのです。

開祖さまは、私たち一人ひとりが、仏さまの尊いいのちを生き、そのいのちにふさわしい生き方に目覚めることを願って本会を創立され、そのご生涯を通じて人々の教化救済に務められました。

わが家も救って頂いたそのひとつです。私を帝王切開でこの世に生み出してくれた母が、産後数ヶ月にわたって病床に臥せり、やせ細って寝たきりになっているところに救いの手が差し伸べられたのです。不思議なことに母は入会後一週間で床を上げ、祖母とともに救われた喜びで布教伝道に励んだのです。私が生まれた翌年の昭和 28 年のことでした。その後、私が中学生の時、父と母が離婚し、一時期親子が離ればなれになった時期もありましたが、大学に行く頃には、母と姉と私の 3 人暮らしが自然とできるようになりました。それも祖母や母が仏さまの教えを離さず、深い懺悔の心で、父の実家の佐々木家の幸せを願い続け、善行を積み続けてくれたおかげさまと、後になって知りました。が、中学、高校と家庭に恵まれず、一人孤独を味わった私にとって、円満な家庭は「理想」でした。

その「理想」が今現実に私の目の前にあります。しかも、開祖さまが**「人間の心の中で一番尊いのは『人を幸せにしたい』という心。人間の行いの中で一番価値があるのは『人を幸せにしてあげる』行為。仏道というものは、結局これに尽きる」**と教えてくださった、人間としての最高の心のあり方と生き方を、微力ながらも家族そろって育み、歩めるのです。どんな条件や環境に出遇うとも、その条件、環境を通して心を成長させることができる人生の羅針盤を頂戴したのです。その幸せや感動を、今は亡き祖母や母に心から感謝申し上げ、ご縁のある多くの方々にお伝えしたいと思います。

今月の会長先生のご法話は、**「ともに法の世界へ」**です。人様の幸せを心から願うという本来すべての人に具わっている明るく、優しく、温かな心を、人様とのふれあいをご縁にし、育てながら、教えに導かれた感動や喜びを、どんなに小さなことからでも言葉に出して、ご縁のある人々にお伝えして参りましょう。その実践がより確かな感動と喜びを自分自身にもたらすことでしょう。開祖さまの願いはそれに尽きると信じます。

講演会にて　元気のある「本もの」に！

10 月 9 日（日）、キャンパスプラザ京都において京都教育者教育研究所主催の「元気の出る教育講演会」が開催され、大畑誠也氏（九州ルーテル学院大学客員教授）が熊本県内の高校での教員・校長体験を熊本弁でユーモアたっぷりに熱く語った。

21 世紀を担う若者には「本もの」が求められ、高校の成績だけが人生の全てではなく、また出身校の違いは社会では通用せず、生き抜くには「悪戦苦悩能力（挨拶・体力・感性・集中力・思考の能力）」を身に付けることが大切であると述べた。

特に挨拶が最も重要で、人間関係の基本となる親子の挨拶が出来ないと社会に出ても人間関係がとれない。親子の挨拶と学校の成績向上との因果関係を数値で証明した。体力とは大きな声を出すことが出来ることで、そのために朝食を摂ることが大切と説明。そこで、朝食をとらない家庭もあるため、公立では全国で初めて学校で朝食をとれる体制を整えた。感性とは人の気持ちが分かることをいい、そのためには家の手伝い（炊事、洗濯、掃除）の「体験」が大切と述べた。集中とは一生懸命になることで、「目標」の大切さと故松下幸之助氏の言葉を引用して「思い・想い・念い」の違いを紹介。思考とは自分の考えを持つことであり、人の話を聴くことで自身の考えに蓄えができ、その中から自分自身の考えになっていくことを説明した。

5 つの実践後は「検証」する。数字で結果が出せるものは数字で残すことと述べた。最後に「難しいことではない。凡事徹底」と話しを締めくくった。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《庭野平和財団の創設》

世界宗教者平和会議の活動は、無私の奉仕に徹する多くの人たちによって支えられてきた。その力の一助になればと考えて、立正佼成会の会員の力を借りて、庭野平和財団を創設したのは、昭和 53 年のことだった。**この庭野平和財団は、宗教精神を基盤とした世界平和実現のための思想、文化、科学、教育などの活動や研究に対する経済的助成、宗教者や平和活動家の国際交流の推進、各種シンポジウムによる、平和思想の浸透を目指してきた。**

そして、宗教協力を基盤として平和活動を推進している人たちの労に報いるために、昭和 58 年から「庭野平和賞」を設け、副賞として 2 千万円を贈呈することにした。一般には、現実の社会を変革していくのに宗教者は、ほとんど無力のように考えている人が多いのではないだろうか。だが、宗教者が心を一つにして世界の平和の問題に取り組む姿を見てもらえば、そこにイデオロギーや国家体制の違いを乗り越える道があることに気づいてもらえるはずだ。

だから平和を実現するのには宗教協力というステップがどうしても欠かせないというのが庭野開祖の信念であり、その宗教協力は辛抱づよく一つ一つの活動を積み重ねなければならない難事業なのである。一陣、二陣と続く人がなくては、この難事業は成らない。庭野平和賞は、その願いをもって設けられたものであった。世界の 82 ヶ国の宗教者や有識者 600 人の方々に、候補者の推薦を依頼し、第 1 回の受賞者として、ブラジルのキリスト者ヘルダー・ペソア・カマラ大司教が選ばれた。

カマラ大司教は、京都会議以来の世界宗教者平和会議の同志だった。京都会議の共同議長を務め、基調講演での貧富の格差を是正するための社会構造の改革を訴えるなど、参加した宗教者に強い印象を与える働きをされた方だ。現実にブラジルを中心にラテン・アメリカ全域で、非暴力を貫きながら抑圧と貧困からの解放のために働き、「第三世界の弁護士」として、人々の絶大な支持を得ていた。

4 月 7 日、東京・港区のホテルで、第 1 回庭野平和賞の贈呈式が行われた。カマラ大司教は受賞記念講演として、「世界平和のための宗教協力」と題して、京都会議の「京都宣言」を引用し、「この宣言は、私たちがそれぞれの宗教の立場から何を実践したらいいのかを明らかにする意味で、繰り返し読まれるべきだと思う」と、その意義を強調して下さった。

そして仏教の法門を引いて、**「道理にかなって四諦に生き、涅槃に達しよう。我利、我欲、不義といった煩悩を脱しよう。愛が憎しみに勝ち、望みが恐れと絶望に勝ち、平和が戦争に勝つ助けとなるよう、私たちは善をおさめて生きよう」**と呼びかけて、宗教界、政財界、国連関係者など 500 人を超える出席者に深い感銘を与えた。

翌日は、釈尊の降誕会だった。大聖堂に集まった会員を前にして、カマラ大司教は受賞の挨拶に立ち、釈尊の「火炎の説法」を引用して語りかけた。「釈尊は、新しい弟子たちを連れてガヤ山を越える時、比丘たちよ、すべては燃えていると語りかけられ、こう説かれました。

人々の目は貪欲に燃えている。その目で見ると、すべてが燃えているように見える。人々の耳が燃えている。鼻も、舌も、からだ全体が燃えている。聞く時も、呼吸をする時も、話す時も、歩く時も、彼らはすべてを燃やす炎に包まれている。それは貪欲、憎悪、無知の炎である。また、生・老・病・死の炎である。苦しみ、悩みの炎である・・・と。

今の世界にも、業火が燃え盛っています。地球の資源の 5 分の 4 は、世界人口の 4 分の 1 の人々によって占有されています。工業技術の進歩によって人類は貧困を根絶する方法を知ったにもかかわらず、超大国と呼ばれる国が軍拡競争に目の色を変え、そのために世界中で何百万人もの人々が飢餓のために死んでいるのです。私たちは腕をこまねいて、この世の業火をただ見ているだけでいいのでしょうか」

カマラ大司教は日本滞在の日程を終えて、ブラジルに帰国する途中ニューヨークに立ち寄り、国連関係者や宗教者の会合で平和賞受賞の意義を力説して下さった。**「キリスト教徒は、いまや教会の中で神の愛を説くだけでなく、世界の宗教者と手をたずさえて平和のために努力しなければなりません。それを仏教徒の兄弟たちが、庭野平和賞を通して私たちに教えてくれたのです」**このカマラ大司教の報告で庭野平和賞の意義が世界から注目され、キリスト教の方々にも理解してもらえるようになった」　(つづく)

渉外部からのメッセージ

日本史上最悪の三連続地震がペリー黒船来航の 1853 年の翌年から始まりました。東海地方でマグニチュード（M）8．4 の大地震、翌日にもM8．4 の大地震が関西で発生、その 1 年後に江戸でM6．9 の地震で壊滅状態に。この後、コレラ伝染病に見舞われ江戸での死者は 10 万人という説が…。しかも幕末の争乱。しかし、我々の先祖は見事に明治維新を成し遂げました。私達はその子孫であることを肝に銘じたいです。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK 京都教会　FAX 075-762-2266